
恋姫†無双 ～黒槍の御遣い～

yokomiti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋無双 ～黒槍の御遣い～

【Nコード】

N4927Y

【作者名】

yokomiti

【あらすじ】

一刀……ごめんなさい。 貴方の愛した魏は負けてしまいかもしれないわ……。

魏が三国を統一し、平和が流訪れた世の中。

しかしその肝心なる魏は一刀を失ったことの喪失感によって、気落ちしていた。

そんな時起きた、五胡の侵攻それを排除するべく魏軍が討伐に向かうが、敗退。

蜀の翠率いる軍によって何とか逃げ延びる。

そして、一つの城に居を構えた華琳。

ある夜、華琳が空を見上げていると、一つの流れ星が流れた。

新たな御遣いの訪れ（前書き）

この作品はbeasonさんの作品恋姫＋無双の二次創作です。
主人公が一刀君ではなくオリジナルです。

魏✓後が舞台ですが、ラブコメに魏勢は関わりません。
魏のヒロイン勢の婿は一刀君のみです。

新たな御遣いの訪れ

「フフツ、今のこの様を一刀が見たらなんて思つかしら」

ここは、魏領内にあるとある城。その屋根の上で私こと曹孟徳・・・・華琳は一人、自嘲しながら寝転がりその遙か上空、天にある月を見詰めていた。

そんな私が思うのは彼のこと、我ら魏の皆と苦労しながら馬鹿しながら笑いあいながら彼と共に天下を目指していたときの事。

そして、天下統一を成しえたとき彼が消えてしまった時のこと。今日出ている月はその日に見た月に少し似ていて、私は何だか嫌だった。

あの日から、一刀が天に還ったその日から、私、いや魏の面々は弱くなったと思う。

あれから既に三年経ち私達は彼が消えた事により生じた心の隙間を埋める術を見つけた。

といっても、春蘭は未だ夜になつたら時々だが涙で枕をぬらしているし。秋蘭、稟はため息をつく回数が増えてきたし

桂花でさえも行動にキレがなくなつたというか。風は居眠りをすることが増え何やら思いつめている様子だった。

霞は飲む酒の量が目に見えて増えた。そして季衣と流々の笑顔もぎこちないし、一番接していたであろう三羽鳥は未だ目を赤くしているときがある。

そして私は・・・・。

私も一刀が消えた事に対して何もただ指をくわえたままいたわけではなかった。

天という未知なる物に対して、私なりに考え一刀を取り戻せない

だろうか」と講じた策が天下三分の計である。

しかし、それもどうやらはずれのようにだった。三年たった今でも還ってくるということは無かった。

「ふう……………」

そして、今回の事である。

五胡の侵攻。完全に隙を突かれた。

一刀がない事で、魏の面々に隙が出来た。いや、一刀のことを良いわけにするなんて私はついにボケでもしたかしら。

今回のことは完全に私達の怠惰の結果だ。何とかせねばならない。今既に、五胡の侵攻は涼州にまで及んでいる。侵攻の報を受け慌てて私達は出撃をした。

しかし、敗北とまでは行かずとも手痛い、被害をこうむりこうして蜀の援軍であった翠達に一旦場を預けこうしてここまで撤退してきたわけである。

「何とかしなければならぬわ。一刀かが帰ってきた時。魏がなくなっていましたじゃ、話にならないものね」

そうして、腕で目を押える。色々な思い、記憶が私の頭の中をめぐる。

それは、ただの日常、一刀がいた頃のただ変わらない日常である。思いつくというものは常に美化されそして忘れ去られていく物だ。

その証拠に私の中の一刀、その顔、声を思い出すことが段々と難しくなってきた。

「一刀、合いたいよ……………」

小さく呟く。私の頬を何かが流れた涙だ。

あの時、後悔などは無かった。しかし、今弱くなった私に同じく一刀に聞かれたとしたら後悔していると答えてしまうだろう。

何が悪かったのか。低軍山で秋蘭を助けたことか、それとも我ら魏が天下を取ってしまった事か。

どうすればよかったというのか。どうとつても私達と一刀の間には決して結ばれない。ちくしょう。ちくしょう。

「私達は何をしたっていうのよ！！ そりゃ、私達が天下を取ったことは天の歴史を変えたかもしれないわ！！ でも、それで一刀を取る必要があるの！？」

私は腕をどけ立ち上がり、私に苦しみを与え続けている満月に向かって叫ぶ。

もし、ここにもう一人私がいたらふん、全く霸王らしからぬ発言だわ。なんて言うと思う。

「しょうがないじゃない！ 私の中の一刀が大きすぎるの！！ もう、苦しいのよ！」

ふん、それこそ戯言だわ。 あなたは誰？ そう、曹孟徳よ。 誰もがひれ伏す霸王よ。 だけど今のあなたでは誰もひれ伏すどころが見向きもしないわ。

だって、今のあなたは何処からどう見てもただの小娘だもの。

心の声が私の言う事を真つ向から否定する。その言葉が、私の心を貫く。そう、今の私はただの小娘だ。

「わかってるわ。 わかってる わかってるのよ」

しょうがないわね、そんな小娘なあなたには今の状況をどうにか

するには荷が重いかもしれないわね。そのままでは、一刀に会う前に魏という国は消えるわ。

その事を実際に考えるとゾツとした。目から涙が溢れ、身体が震え、止まらなくなる。目の前が暗くなってくる。

もう、ちょっとからかったただけなのに泣かないでよ。ふう、私も一刀の帰る場所が無くなるというのは許しがたいからあなたに良いものを貸してあげるわ。がんばりなさいよ。じゃあね。

「え？」

私はその心の声がいったと思われる言葉に間拔けな声を出した。そして、ふと目を上げ月を見る。

新たな御遣いの訪れ（後書き）

始めまして横道と申します。

横道は、詠、華琳、桂花が大好きです

感想や、しおりを頂けると横道は喜びます

これからよろしく願います。

会合（前書き）

注意、御遣いのつかいという字、遣いになっていたり、使いになつていたりするとは思いますが気にせず読んでください。

会合

私は目を上げ月を見る。何だろう？ 心の声が言っていた良いものとは……。

すると、私の目があるものを捕らえた。夜空にあるそれは光を發し、空を横断し落ちてきている流れ星だ。

私はあのときのことを思い出していた。一刀と始めてであったときのことだ。その時も不可思議な流れ星があった。

そしてそれはドンドンと高度を下げていきこの城の近くにある、林に墜落した。

「一刀！！」

私はそれを見、落ちたと思われる場所を推測覚え、そう叫ぶと急いで屋根から降り、馬を待機させてある場所へと向かっていた。そしてそこへと向かう途中に秋蘭に出会った。

「華琳様！！」

「ごめんなさい。秋蘭 直ぐに戻るわ。今は理由を聞かないで」

私はそう言つてわき目も振らずに走っていく。この事で何かが変わる。そんな期待が私の胸にあった。

馬屋に向かうと私は対して馬を選ぶような事もせず適当に早そうと思われる馬を選別し、その流れ星が落ちた所へと向かった。

私は馬をその林へと向かわせた、馬屋に行く途中周りの者たちが私の事に気づいたが何も言う事は無かった。

私の霸王としての威光がなくなってきたからであろう。

私は急いだ。そこらにいる兵達に馬を当てないよう起用に操りながら目的地である林を目指す。町を出、目の前に生え並ぶ木々を抜ける。そして何故だろうか落ちだと思われる部分からは光が放っていた。私は馬を降りてその場へと歩いてゆく。

そこには、一人の黒い鎧をまとった人物が一人たっていた。

「一刀・・・・・・・・なの？」

私は片手は馬の手綱を握り、もう片方の開いている手は側に生えていた木に添える。

私はその人物が一刀なのかどうか分からなかった。見ての通り鎧をまとっているからだ。片手にはどす黒い槍を持っていた。

そしてその鎧がこちらを向く。先ほどまで発していた謎の光はいつのまにか収まっている。

そしてその鎧は私に向けて首を横に降った。それはこの黒鎧の人物は一刀ではないということだ

「そうなの・・・・・・・・」

私は落胆した、勝手にこの流れ星が一刀だと勘違いしただけなのだ。

そしてその男は私の方へと歩み寄ってくる、そして臣下のように頭を垂れて言った。

「私は新たな天の御遣い。この世の危機を救うべくここに馳せ参じ参った。あなたの命一つで私はこの世で最強の矛にも盾にもなりません。」

私は前の世界ではKと呼ばれていたものでこちらでもKとお呼びく

ださい」

「そう、あなたは天の御使いなの……」

華琳にはこの男の言い方にふと思ったことがあった。

「なら、本郷一刀はあれからどうなったか分かるかしら？」

それはこの男は、どうやら自分を天の御遣いだと認識している事である

以前天の御遣いとしてここに来た本郷一刀は、自分を御遣いだとは認識していなかった。それに対しこの男は自らを天の御使いと言っている。

ということとは、この男は本郷一刀よりもずっと天の御遣いとして近い存在にあるのではないか？それが華琳がその引掛かりにたいして思ったことである。ならば、本郷一刀のその後を知っていたとしてもおかしくは無い。

K 姿勢はそのままに頭だけを上に向け、質問に応える。

「ふむ、それはあれからと考えてよろしいのかな？」

「ええ」

「ならば、話せない事もあるがまあ、おおまかになら話しても良いだろう

本郷一刀は今現在君達の言う所の天にて、必死こいてこの世界の知識を求め、剣術の修行をしているはずだ。ここの世界に戻ったときに少しでも役に立てるようにと」

華琳はその話を聞き、先ほどまでぬらしていた頬を再度ぬらした。

両手で年相応の少女のように涙を拭う。

その様子をKは黙ってみていた。

そして、華琳はひとしきり泣くとキリッと顔を上げる。その顔は今まで失われていた霸王としてのオーラが戻っていた。

「そう、一刀はそんなにも頑張っているのね。ならば、私も何時までも躓いてばかりはいられないわ。あなたKといったわね。今涼州という場所に五胡という連中が侵攻をしかけてきているわ。その退治をお願いしたいの。出来るかしら？」

「御衣」

Kは再び、頭をたらず。華琳はいつもの通り片手を腰に当てている。

その顔にはいつだかに消えた笑みが戻り始めていた。

「ありがとう、私の名前は曹孟徳。あなたには真名を預けるわ。これからは華琳と呼びなさい」

「ありがたく、頂戴いたします」

「では、移動へはこの馬を使うと良いわ。場所は分かるかしら？」

Kは立ち上がり、華琳から馬の手綱を預かる。

そして、一気にその馬に飛び乗った。その勢いで馬が暴れたが、Kはムリヤリ押さえつけた。

「わかります」

「なら、大丈夫ね。頼んだわよ」

「では行ってまいります」

Kは華琳から背を向けて、五胡を打ち倒すべく涼州へと走り出した。

会合（後書き）

以上第二話でした。

お楽しみいただけたら幸いです。

対五胡戦

謎の黒鎧男Kは馬を飛ばし三日ほどで涼州へとたどり着いていた。馬には三日御晩休まずに走らせたために涼州へと着いたときはその馬は口から泡を吹いていた。

「ありがとう」

Kはその馬の背を撫でその馬から跳躍すると、馬の進行方向の遙か前方に着地し、馬は役目を終えたとも言うように足からその場へと崩れ落ちていった。

そしてKは鼻をクンクンと動かし、戦の匂いを察知するとそちらの方向へと馬顔負けのスピードで走り出していった。

走り出し、しばらくすると目の前に少し高めの丘を発見する。

Kはその丘へとのぼりそこから下を見下ろす。すると、ここから少し西の方向に交戦していると思われる団体が会った

Kはその闘っているもの達に向けて目を凝らす。すると、Kはあることに驚いた。

涼州で戦っている、恐らく見方の軍の装備は嚴重に固めているのに対して、敵の五胡の軍は一人一人見るからに身軽な鎧しか着込んでいなかった。

その分見方の軍よりも小回りが利くため苦戦を強いられているようだ。

「ふむ、これは早急に助けねばならないようだ……」

見ればドンドンと、見方側の軍が押されていつている。

Kはそこからひとツ飛びその戦場の中心地を目指しジャンプした。

この戦いが始まり既に早一週間が経とうとしていた。

当初は魏の撤退を手助けするという事で、蜀の筆頭軍師の朱里から出撃の令が出された。

相手は馬の使いになれている五胡ということもあり、万全を期して馬超・翠くを將軍とした軍が編成された。もつともこれには攻撃されているのが翠の出身地という事もあり、本人からの希望もあったようなのだが。

そのようなことから、この戦いは当初あっさりと相手側が引くと思われていたがこの軽装備故の機動力に惑わされてこずっていた。そんなときだった。

蜀軍と五胡の軍の丁度間を二つの軍を分けるように何か強烈な一撃が放たれたのである。

「なんだ!?!」

「おいおい、いったいどうしたってんだ?」

「もー、なんなの? 五胡だけでいっぱいいっぱいなんだから違う敵とか出てこないで欲しいんだけどー」

いきなりの事に驚いている両軍、そして翠と馬岳・蒲公英く両將軍がともに声を上げ、上空を見上げる。

するとそこには何やら黒い塊がここに向けて落ちてきているように見えた。

「あわわわわわわ」

その事に慌てふためている蒲公英。

そして、その黒い何かは蜀軍と五胡軍の間に墜落した。

ドーンという大きな音と共に重さゆえか、墜落と同時にあたりに大量の砂埃が舞った。

その黒い何かが持つている黒い槍を一振りすると待っていた砂埃が消え去った。

そしてその黒い何かは蜀軍を背にしてここにいる者全員に話し掛けるように大声をだした。

「我は、魏王、曹孟徳の命によりここに馳せ参じた。 我の主の命はただ一つ五胡軍君達を撤退させる事だ！ そのまま逃げるもよし 立ち向かってくるならこの槍のさびにしてくれようぞ！！」

そう言うのと、さすが五胡軍この謎の男の気配を察知したのか凄い勢いで引き返していった。

しかし、それでも大群といえるほどの量の兵がここに居残った。

「君達は残り我と戦う事を選んだか、よろしいならば蹂躪だ」

その謎の男はそう言うのと、持っている槍を構え五胡軍のと真ん中に突進して行った。

そして、その男は刺し、なぎ払いという単純な作業を軽快なステップで繰り返していた。

相手の五胡軍もそれに応戦しようと立ち向かっているがいかんせん相手が悪い、その男の前になすすべもなくただ兵の数を減らし続けていた。

その様子はその男が言ったとおり、戦闘というよりも蹂躪の方が正しいのかもしれない。

ともかく、その場にいた蜀軍の兵の皆はただその光景に呆然とし

ていた。

そして、最後の一人にその黒い槍が深々と突き刺される。必殺の一撃だった。

その男は最後の一人に止めを刺し終わると振り向き蜀軍の将、馬超>翠<と馬岳>蒲公英<のいるところに向かい歩き出した。

途中の兵達がこのような危険な男を通してなるものと立ちふさがるが、紙のようにちぎっては捨てられていた。

そしてついに男と翠が対面した。二人はこの男を警戒し武器を構えている。

「おいおい、安心しろ。俺は君達の見方だよ」

「そうかだが、あんな圧倒的な力を見せられてはそうやすやすとは信用できないな」

「それはしょうがないと思うが、実際に俺は曹孟徳の遣いだ。それ以上でもそれ以下でもない」

翠は言いながらその男の真意を探ろうとしていたが、実際それほど頭の回らない翠にとってはそれは無茶な注文だった。

「ああー、やめたやめた。あたしにはこういう腹の探りあいとかは向いてないや」

そういつて翠は武器を下ろして頭を左右に振る。ポニーテールにしてある髪の毛がフリフリと揺れた。

しかし隣の蒲公英は未だ武器を構え、隙を見せまいとしていた。

「助かったよ。正直あたし達でも五胡の軍にもうすこし当たられ

ていたらやばかった」

「ふむ、まあ。俺は主の命に従ったまでだがな」

そう言つて二人は歩み寄り、お互いの手を握り合う。男の声はその全身覆われている鎧のせいなのかくぐもって聞こえていた。

お互いの顔には男の顔は鎧で見えていないが、笑みが浮かんでいた。

「あたしの名前は姓は馬、名は超、字が孟起だ。馬超と呼んでくれ、よろしくな」

「俺の名はKと名乗っているよろしく頼む」

「もーっ、ねえさまは何でこんなめツちゃ怪しい人のことをポンポンとしんじられるのー!？」

隣では蒲公英があつさりと、自分の姉がこの怪しい人物Kに対して気を緩めたことに大声を上げていた。

「それでKは曹操の命でここまで来たわけだ」

「ああ、そうなるな」

翠とKの二人はあれからその場からすこし離れたところで陣を取り腰をやすめていた。

Kについては翠が陣を組んだときに直々に事情を曰く、曹操からの援軍であるということと話を付けてある。

そして今その翠、蒲公英、Kの三人は火を囲み持ってきていたそ

れほど強くない酒を開け飲んでいた。

Kは酒を飲むために頭にかぶっている鎧は脱ぎ捨てて傍らにおいてある。

翠とKは普通にゴクゴクと酒を飲んでいるがその場から少し離れたところでは蒲公英がちびちびと飲んでいた。

「で、Kはこれからどうするんだ？ あたし達は一旦蜀へ帰って報告してきたいんだけど……」

「それなんだが、その報告はこの軍を蜀に帰らすことで行っていただきたい。翠には俺がしっかりと五胡の連中を撤退させたという事を我が主に報告してもらいたい」

Kは持っていた酒が入っている器を膝の上に置き、翠の目をまっすぐに見て言う。

先ほどまで何とはなしにKの方を見ながら飲んでいた初な翠は急に見詰められて頬を赤くしていた。

「わ、我が主って言うത്曹操のことか？」

「そうだ」

少々どもりながらも尋ねる翠、そしてKがそれに答えると。その頬の赤さと暑さをこまかすように持っている杯に注がれている酒をグイッと飲み干す。

「頼めるか？」

翠にそう尋ねながら、Kはそばに置いてある徳利を取り空になった翠の杯に新たに酒を注ぐ。

「難しいかもしれないな。報告してからでもいいならいけないことも無いけど、ただ將軍なしで軍を勝手させるのはちょっとな・・・」

翠はどうもといった感じに頭を下げながらその酒を受けクイクイっと飲む。

そして、その話を隅で聞いていた。蒲公英は元気よく立ち上がり言った。

「なら、私が軍を蜀までつれていくよ！！ 姉さまは、そのKつて方と二人で行けば良いんじゃない？」

「なるほど！！ その手があつたかあ！！」

蒲公英は小悪魔の微笑で翠に二人での部分を強調しながら言うが、翠は大分酒が回っているらしく蒲公英のイタズラに気づいていなかった。

対五胡戦（後書き）

全七部構成予定。もしかしたら八部になるかもしれない。

六部後半まで現在執筆完了中。しかし亀筆なのでゆっくり投稿。

横道です。

今回もお読みいただきありがとうございます。

お楽しみいただけたら幸いです。

翠と一緒に（前書き）

文字数が少ないのは私用です。
嘘です。私の文才が無いからです。
では、第四話お楽しみください

翠と一緒

そうと決まればあれよこれよと手際の早い事、その日の晩はその場で一旦睡眠を取り次の日の早朝軍の皆に通達をした。

曰く、本日未明より馬岳將軍指揮の元蜀へと帰還する、猶馬超將軍については援軍をよこしていただいた曹操に礼を申し上げに行くために同行はしないという事。

その報が全員に回りきった頃にはもうすでに太陽は昇り始めていて、蒲公英が軍の兵士皆をつれここから蜀に出発したときには既に太陽は一番高く上りきっていた。

Kと、翠はその行軍を見送った後ゆつくりと、魏へと歩みを進めていた。

「しっかしKのその鎧？ は着ていて重くはないのか？」

翠は隣を馬に乗り歩くKを皆がらいう。馬に負担がいつていないか心配というのもあった。

「ああ、大丈夫だ。これも見た目ほど重くは無いからな」

「ふうん。ならいいけど」

そしてその後はゆつくり七日ほど時間を掛けながら、華琳が入る城へと向かっていた。

その間たいした五胡からの妨害等はなく、ようやく目の前に華琳がいる城が見えてくる。

「おお、あれか？」

「そうだな」

翠は嬉しそうに目の前に聳え立つ城を指差しKに尋ねる。Kはそれを肯定する。

二人はこの七日間で馬の事やら、戦い方のことやらを話し合い随分と仲が深まり翠は真名をKへと預けていた。

「じゃあ、早く行こうぜ」

翠はそう言うと言のスピードを少しだけ上げる。それに、Kは微笑しながら着いていった。

今翠とKは魏の重鎮の面々が座る中で一段低くなっている場所で頭を深く下げていた。

その様子に華琳以外の魏のメンバーは何事だろうかと既に見知っている翠はともかくしてこの怪しげな黒鎧は何なのだろうと疑心の目を向けていた。

その中でも春蘭と桂花だけは完全に敵対しているような目だ。

一人事情を知っている華琳だけはいつもと変わっていない。

そんな中、ようやく華琳が口を開いた。

「この度の五胡の撤退みごとであった。そちには後ほど褒美を取らせよう、今はその場で何があったのか私に教えてくれるかしら？」

「はっ、私達が魏軍から五胡の軍勢を引き受けた後の事から話します。魏軍から五胡の連中を引き受けた後、私達蜀軍も五胡のあの立ち回りに苦戦しておりました。」

そんな時、遙か上空から、このKと名乗る者が降り立ち、戦局

あつという間に変えてしまいました。そしてその後この者は蹂躪するように五胡の軍を打ち払い今に至ります」

慣れない言葉で翠は説明をしていた。途中途中どもってはいたがちゃんと最後までいえたのでよしといえるだろう。

「なるほど、そちらのKなる者、先の証言に偽りは無いか？」

翠の言葉を腕を組みながら目をつぶり吟味するように聞いていた。華琳がとなりで頭を垂れているKに尋ねる。

「はい、その通りでございます」

「よろしい。ならば後ほどとらせる褒美は何が良いか考えておくがいい。私達はこれからの事を踏まえ群議に入る。下がりなさい」

「「御衣」」

そう言つと二人はその場を離れる。後ろにある扉から二人は出て行った。

「ふう、」

それを見て、魏の王である華琳はため息をもらす。素直に本当にこの短時間に五胡の軍勢を退けた事を驚いているようであった。

「どういうことですか？ 華琳様、あの者は何者なのです？」

それを見て魏の大剣である春蘭が先ほどの謎の人物について尋ねる。その声はここにいる他の者の声を代弁していた。

それに華琳は先ほどと同じようにため息をつきながら答える。

「本人曰く、天の御使いなのだそうよ。」「なっ……」実際私もある意味では彼に助けられたかもしれないわ」

「華琳様！！ 本郷以外に心を許すなど……！！」

「大丈夫よ、春蘭これから先私の唇を許すものは一刀だけだから。それについても今から話すわ」

そこまで言うとは華琳は一息つき周りを見渡す。そこには一刀と親しかったものの全員がいた。

「皆のもの、よく聞きなさい。 そうね一週間以上前に私は月を見ていたら流れ星が地上に落ちるのを見たわ

私は、一刀がここに来たときのことを覚えていて一刀かと思ってその場所へと向かった。

けれど、そこにいたのは自らを天の御使いと名乗る、不思議なやからだけ。

その者は私の力になりに来たといっていたから敵ということは先ず無いと考えて良いでしょう。

そして大事なのはここから、私はあの者が天について詳しくそうだったから、一刀がどうなっているのか聞いたわ。

すると、一刀は今ここに戻るために勉学を学び、身を守るための剣術を習っているらしいわ。

そこで思い起こされるのは我らのこと一刀がこんなにも頑張っているのに我らはこんな腑抜けていてもいいの？ そんなはずはないわ 誰よりもこの平和を望んでいた一刀。 けれどそれを見る事の出来なかった一刀。 その一刀は今ここに帰ろうと努力をしている。 なら私達がする事は何？

帰れる場所を守る事でしょう？　ならば、我らは何時まで転んでいられるわけには行かない立ち上がりなければ」

華琳の演説が進むにつれ、その場にいる者たちの空気が変わってきた。

それは、以前一刀がいた時のような魏よりもはるか強固な存在として生まれ変わろうとしているかのようなようだ。

「皆のもの！！　今努力している一刀に誇れるように自己研鑽を怠らないように！！」

「はっ！！」

幼虫が蛹になったように蛹の時期は終えいま魏という大国はさらなる力を蓄え成虫へと今生まれ変わった。

「なあなあ、これからどうするんだ？」

あの場から出た後、後ろを着いてきていた翠がKの隣に並び彼の顔を覗き込みながら聞く。

それに対してKは驚いて聞きかえした。

「え？　蜀に帰るんじゃないのか？」

「なに言ってるんだKは。せつかくここまで来たんだから何か観てから帰るに決まってるだろう」

翠は自分がこのまま帰るのだと思っているKに少しだけ怒りながら言う。

腰に両手を当てプイとしている彼女はとても可愛く見えた。

Kはこのまま、翠に機嫌を損なわれているとマズイと感じ、フオローをすることにした。

「まあ、俺はこれから主から何かしら言われることがあるだろうからなあ、ここに来たのも数日前だし」

「え？ そうなのか……？」

その事実には翠は驚いたようだった。目を見開きKの方を見ている。そして、何を思ったのかしばらくすると翠は手を前で組みもじもじしだした。

時折Kの方をちらちら見ている。その様子はまるで恥らう乙女のようだった。

もしも、蒲公英がここにいたならば今の翠をからかっていただろう。

しかし、その彼女は今ここにいない、蜀にいる。彼女の決心のタイミングを崩す者がここにはいなかった。

「な、なあ………。K？」

「何だ」

「もし、もしだぞ。私が一緒に町をまわりたいって言ったらついてきてくれるか？」

翠は決心がついたのかKへと話しかける。最後の言葉は尻すぼみに小さくなっていた。

翠は隣で上目遣いにKを見ている。その顔はトマトのように赤くなっていた。

「おまえとか？ うーん。そうだな、主に自由にしていいたいと言われたら一緒に行っても良いぞ」

「本当か！？ 約束だからな！！」

Kがそう言うのと、翠はパアッと顔を輝かせ両手でKの片手を掴みぶんぶんと振る。

馬超こと翠、この時彼女は初めての恋愛を本人は気づいていないが経験していた。

翠と一緒に（後書き）

今、物語の後半部を書き上げているのですがついつかり槍と黒い鎧の設定を忘れていました（汗）（汗）

途中これはさすがに無いだろ。見たいな感じで槍と黒い鎧を出します。のでご了承ください

というか、槍と鎧忘れるとかww。これないと、小説のタイトル成り立たないよ

日常（前書き）

サブタイトルは適当です。本来の意味での適しているという意味ではなく現代にてよく使われている方の意味です。
でわ、第五話お楽しみください

日常

自由行動であれば、一緒にまわると約束した二人。

その二人が適当に城の中をぶらついていてと一人の兵士がやってきた。

その兵士はドクロを主としてデザインされている鎧をまとっている。魏の一般兵の基本装備だ。

「曹操様より。そちらのK殿へもう一度先ほどの、部屋へ来るようにとの伝令があります」

そう言う、その兵士は来た道を戻って行く。自分の本来の仕事に戻るであろう。

「Kの言った通りだったな」

「ああ」

その伝言を聞き、兵士が向こうまで行ってここから見えなくなった時K達二人はそのような感想を漏らしていた。

その後二人は先ほどの部屋に戻るために来た道を戻るために歩み始めた。道中Kはここまで適当に歩いてきていた為に道順を忘れていたが、翠が覚えていたため問題はなかった。

「あ、その階段じゃないぞ。一つ向こうのだ」

「そうか、すまない」

翠は、Kが違う階段を上ろうとしているので間違いを指摘する。

「それで、本当に私もついて行って大丈夫なのか？」

翠は道中道順をKが忘れていたため、私もついていくと翠が提案したのだがよく考えると自分が着いていくのではなくこの城の兵に案内させたほうが良いのではないか？という事に気がついた。

そして、翠がついていった事によってKの立場が何かしら悪くなるのではないかという心配をした翠は聞く。

「大丈夫じゃないのか？」

しかし、そんな翠の心配を知ってか知らずか、当のKは翠がついてくる事をまったく気にしていないようだった。

そして先ほどの部屋の扉の前にたどり着く。翠はそわそわしながら、Kは反対に全く緊張していないのか扉の前でも普段の態度を崩すことは無かった。

「来たわね」

華琳は先ほどと同じ席で、二人が入ってきた扉を見下ろす形で座っている。

周りを見渡す。先ほどの時と違う点は周りには魏の武将の面々がここにはおらず、いるのは華琳、Kそして隣で小さく縮こまっている翠だけということだけだ。

「あら？ 翠も来たの」

華琳がKの後から続くように入ってきた翠を見ると、少しだけ目を細めると言った。

「ああ、悪かったか？」

「いいえ、問題ないわ。ただ、少し驚いただけ」

その言葉を聞きながら、Kは一番近くにある、椅子まで歩いていきその椅子を引いた。木と石が擦れる音がする。

Kはその椅子に座るとキシツという木が軋む音がした。かなり年期の入った椅子のようだ。

後を着いてきていた翠もKが座った隣の椅子を引いて座る。Kが座ったときと同じ音がした。

そして翠が座ると同時に華琳は話し始める。

「まず、先の五胡撃退の件だけど、ありがとう。たすかったわ。それと、貴方への褒美の事だけど……貴方が何時までこちらにいるかは分からないけれど。それまでの貴方の居住食の面倒を見ることがいいかしら？ ああ、それと翠も欲しいなら蜀へのそれは別に取らせても良いわよ」

「ああ、俺はそれで頼む、正直こちらで稼ごうとは思えないしな」

「あ、あたしは別に良いよ。少しの間こちらにいるけど……」

「
翠はチラチラといいながらKの方を見ている。その顔は少し赤くなっていた。しかし、Kは華琳の方を見上げていてそれには気づいていない様子だった。」

それを見て華琳はため息をつき、呆れるようにKの方を見る。

「それとたまに、貴方に家の子が絡んでいく事もあるかもしれないから。その時は軽く流してあげて」

そういう華琳の頭の中には、春蘭が突っ込んで行き桂花が罾をせつせと仕掛けている姿が浮かび上がっていた。

「分かった。もう行つて良いのか？」

「ええ、いいわよ。部屋はもう少ししたら、□（魏の都名前が分からなかったために記号で記載。以後□と表記します）に戻るから好きな部屋を使つてくれてかまわないわ

それに、食堂は……そうねその時になったら兵士にでも案内させましょう。外で食べてきてくれてもかまわないわ」

「分かったよ。じゃあな、何かあつたら呼んでくれ」

Kはそう言つと、立ち上がり自分の座つていた椅子を元に戻す。それに習つて翠も椅子を戻しKの後に続いた。

パタン。ドアを閉じた事によつて乾いた音があたりに響く。Kたちはそのドアをくぐり歩いていった。

二人がそのドアをくぐり、遠ざかる二つの足音が遠くなつてきた時、その扉を見詰め華琳は一人ため息をついた。

「ふう、まったく。天の御遣いというのは皆あんなたらしなのかしら……」

そんな彼女の心境は少々複雑だった。

とある一室で華琳から色々とお言葉を頂いたKと、翠の二人は当初の予定通り町を見てまわろうということになり城から町へと出て

いた。

ちなみにKはいつもの鎧は装備していない。まわるのに邪魔になるので、城を出るときに脱いで適当な部屋に置いてきたのだ。

町はあらゆる人に溢れ返り、にぎやかだった。方々から自分の店へと客を呼び込もうと大声を張り上げているのが聞こえる。

二人が今歩いている所も気をつけないと人波にのまれてしまいそうだった。そこら一帯は一種の祭り状態と化していた。恐らく先週の五胡撃退の報の賜物であろう。

その中を二人は練り歩き、珍しいものを見つけては見に行き、欲しいものがあれば購入していた。

ただKが途中購入する物等は、Kは一銭も持っていなかった為翠持ちだった。

「おい、今度はアレを食ってみよう」

Kが指差す先にはある屋台の中にある肉まんを一回り小ぶりにしたようなものだ。

「おいおい、またあれか？ 似たような物をさっき食べたろう？」

そう、翠の言うとおりKは先ほども似たような肉まんを食べていたのだった。

そして、この祭りの中Kが欲しがったのはこの肉まんに似たような物だけであつた。

「何を言っている。先ほどのアレとコレは一緒では無い。さっきも言ったが作っている人が違うだろう？ アレはあの人の味がこれにはこの人の味がするのだ」

Kのかなり屁理屈な持論が飛び出してくる。ただこのセリフをKが言うのも三回目なのだ。つまり、ここにある今購入させようとしている肉まんは四個目ということだ。

「はあ、しょうがないなあ。おじさん。これ一つ頂戴！！」

「あいよ！！」

そして翠もこのセリフを聞くのは三回目だがきっぱりとダメとは言えず、そんな屁理屈まがいの持論を持ち出すKを見てため息をつき

つつも注文してしまう。

これが惚れた弱みといったやつだろうか。

そんな二人の様子に温かな笑みを送るこの肉まん屋の店主。頼まれた肉まんを屋台で蒸かしなおしていた。

辺りには色々な食べ物の匂いがプンプンと漂っているが、そこにこの肉まんの放つ匂いが追加された。

「はい、お待ち！！ 熱いから気をつけて食べよ！！」

気前の良い店の店主にKは肉まんを手渡される。ホクホクとした湯気が上がっていた。

Kが手渡された隣で、翠が懷から金をいくらか出し店主へと渡す。

「まいどあり！！」

そんな声を背に二人はその屋台を後にした。

さて、次は何処へ行こうか。そんな話をしながら人ごみの中を二人は歩いていった。Kは先ほど買ってもらった肉まんを片手に持っている。

しかし、その肉まんをKは二三口しか食べていなかった。口に合わなかったのだろうか。

「どうした？ さっきまでバクバクと食べてたのに、それは美味しくなかったか？」

先ほどまでとは打って変わって全く食が進んでいないKを心配し、翠が尋ねる。

「いや、そういうわけでは無いんだが、お前は全然食べないな。と思っただけ」

Kが手にしている肉まんを見ながらそう言う。翠は立ち止まり口を手を当てブツツと笑い出した。彼女の笑い声があたりに響く。

「いやー、お前そんな事を気にしてたのか。そんな風には見えないのにな、大丈夫だよ。あたしは蒲公英に何か買って行ってやろうと思っただけ」

ひとしきり笑いそう言った後もまだクツクツと笑っていた。

その間黙って自分が笑われているのを見ていたKにとって面白いと

いえる状況じゃなかった。

そんな翠をブスツと見続けていた。Kはいきなり自分の持っている肉まんを半分に割る。そしてその片割れを翠にさしだした。

「ならやるよ。一人で食ってても美味くないからな」

「・・・・・・ありがとう。K」

翠は驚き目を見開いて、差し出された肉まんを見る。

そしてしばらく、その肉まんを見続け、頬を赤く染めると小さく礼を言っ受取った。といっても購入しているのは全部翠なのだが・

翠はもらった肉まんを早速口につける。Kはそれを確認すると歩き出した。翠もそれについていく、今度はKも先ほどまで、三個目までのようにパクパクと肉まんを食べ始めた。

Kは四個目の翠と半分ずつ分け合った肉まんを食べ終え満足していた。その二人は今翠が買おうと考えている蒲公英へのお土産を探していた。

二人は送るものは話し合い、髪留めにしようと決め可愛い髪飾りが置いてある店に訪れていた。

「しかし、いろんな種類があつてどれがいいか迷うな」

「そうだな」

翠が小分けして置かれている髪留めを実際に手に取り見ながら話す。翠も普段は武将としていても女の子だこういうものには興味があるのだろう。

しかし、こういったものには無縁であるKは先ほどまで肉まんをおごってもらっていたため付き合っていたが、それほど楽しそうではなさそうだ。

そして翠はいっぱい髪留めの種類があるために、どれをお土産にしようか決めかねているようだった。

「あれー？ そこにいるのはもしかして翠ちゃんと、Kさんのー」
そんな時店のとある一角から沙和が顔を出しKと翠を見つけるとこ

ちらへと歩み寄ってきた。

「おっす、沙和」

「こんにちわ」

近寄ってきた沙和に対し二人は挨拶を返す。本日沙和とK、そして翠が対面したのは二回目である。

ちなみに上が翠、下がKである。

「こんにちわなのー二人とも。ところで二人はこんな所で何やってるのー？」

沙和は口到手を当てて尋ねてくる。ちょうどいい時に来てくれた。そう翠は思った。

「実は、蒲公英にお土産に髪留めを買って帰ろうと思ってたんだが、こう数が多くてどれがいいか決めかねていたんだ」

「ふーん、そうだったのー。そういうことならー、この沙和にお任せなのー」

沙和はそう言うのと、そこにある髪留めをいじりだす。翠と、Kはその様子をおとなく見ていた。

「うーん、蒲公英ちゃんの髪の毛はー、可愛い栗色だからー……・これかぁ、この色が良いのー」

そしてしばらく漁っているといい物が見つかったのかそう言って数ある髪留めの中から二つを取り出した。

明るい黄色のリボンと、可愛いピンク色のリボンだ。

「うーん、蒲公英はどっちのが好きそうかなぁ」

翠はそのリボンを沙和から受け取り、唇を尖らせながら見比べる。

翠はしばらく、見比べていると自分では判断に迷うのかKの方を向いた。

「なぁ、K。蒲公英に買って喜ぶのはどっちかなぁ？」

そう尋ねられたKは渋い顔をする。こういうことを尋ねられても困るのだろっ。

Kはこういった事には全く興味のなさそうな雰囲気が出ている。

Kの渋い顔の理由が分かった沙和はあはははー、と言って目をそら

している。

「なんで俺に聞くんだ」

「ダメだったのか？」

翠は疑問の顔をする、本当にKに聞けば何か良い事を言ってくれると思っっているようだ。Kはその事にポカーンとする。

当の本人はファッションなんか全く興味がなかった、異性の物となればなおさらだ。

それを分っていない翠にKは呆れ、沙和は顔は笑っていなかったが内心笑っている事だろう。

その事に毒気を抜かれたKは何か言おうと翠の持っている髪留めをにらむように見比べる。

睨み始めてから少しの時間が経ったがKは何も言う事は無く未だにらみ続けている。

その様子を見かねた沙和が助け舟を出そうと口を開こうとするが、まるでその時を狙ったかのようにKも喋り始めた。

「こっちの方が良いな」

Kはピンク色のリボンを指差した。その事に翠はフム、と言ってからそのKの指差したピンク色のリボンをまじまじと眺め始める。

沙和は手を口に当て驚いたように聞いた。

「どうして、こっちの方が良いと思ったのー？」

沙和もこっちのピンク色のリボンの方が蒲公英には似合っていると思っっていたのだ。

直感でこっちを選んだのかもしれないが沙和はファッションに関してはズブなKがこちらを選んだ理由が知りたかった。

Kはそう聞かれ少しの間考えるそぶりをしてから言った。

「うーん、そうだな。蒲公英と始めてあった時、似ていた色のリボンを着けていたからだ。なんとなく違う色のリボンの方が良いだろう？ 蒲公英なら似合いそうだし……」

それを聞いた翠と沙和は驚いていた。翠はKと出会ってから少しの間一緒にいたから、沙和は先ほど始めて出会い数回会話を交わした

だけののだが、

二人はKを他人のことをよく見ていない人物だと思っていたのだ。それがこのセリフで一転予想以上にKは他人を見ていたのである。

「Kさんって凄いのー。見た目全然人のこと見てなさそうだけど、実はそんな事なかったのー」

沙和がいつもの毒舌をKへと使う。

Kはその沙和の毒舌に予想以上のダメージを受けていた。そんな風に思われていたのがショックだったのだろう。

「お、俺はそんな風に思われていたのか……」

「い、いや、Kは人をよく見ていると思うぞ。ただ、見た目的にはそんな風には見えないというか……」

胸の辺りを右手で掴みガクツと膝を落とすK、それを見て翠がフオローしているがその言葉はむしろ止めだった。

Kはそのままよよーと涙を流している。翠はその後頑張つてKを励まし続けていたが、Kの機嫌が戻ることもなく、困っていた。

ちなみにこの状態を作り出した原因である、沙和は側であははーと言いながら目をそらしていた。そんな沙和を翠が殺気は込めずに睨みつける。

「じゃあ、ちよつと、このリボン買ってくるから……」

翠はどうしようもないと判断し、Kと沙和を残してそのリボンを買うために、会計をするところへと向かった。

途中、ちよつと振り返って心配そうにKを見ていた。

翠がリボンを買って、Kは立ち直っているだろうかと心配しながら先ほどKを置いてきた所まで戻ってくる。

そこには、立ち直ったKは端に置いてあった椅子に座りいつの間に買ったのか一つ肉まんを持ち食べていた。

「おいおい、いつのまに肉まんなんて買ったんだ。お前金なかったんじゃないのか？」

そう翠は尋ねる。もしKがお金を持っているのだったら、先ほどま

で散々自分におごらせていたのは何だったのかと、まあ、おごらせたといっても翠が普段貰っている給金を考えると微々たるものだったのだが

しかしそこでいや、確かにコイツは金を持っていなかったはずだと翠は思い直した。

そして、一つの可能性を思いつき、翠はこの肉まんを買ったのであろう人物に目を合わせた。

「お前か、沙和」

すると、あはははーと目をそらし乾いた笑い声を上げたのだった。

日常（後書き）

8部作予定でしたが、何やらオーバーしそうな雰囲気。
書き溜めも少なく、亀更新ですのでゆったり次話をお待ちください。

続かない幸せ（前書き）

サブタイトル考えるのが面倒ですがせっかくあるのでつけています。
最近になりようやく見方が分かってきました。

今回少し書き方が変わっております
では、第六話お楽しみください

続かない幸せ

1・会議

この町でKが生活し始めて早数日が過ぎた。

この日、今まで平和だったこの町に一つの吉報、いやこの場合は朗報だろうか。が届けられた。

ボタン！！ 扉が大きな音を立て開け放たれる。そこから現れたのは、魏の名も知らぬ一般兵であった。その者は顔を赤くし、急いでここまで来たのだらう荒く息をついていた。

その日は偶然にもこれからの方針を決めるために、魏の重鎮達が集り会議が開かれている日であった。

ここにはもちろんKの姿がある、しかし翠は蜀の人間であるため、この会議には参加ずKが使っている部屋でくつろいでいた。

その者たちを前にして、その兵は方膝を床につけると言った。

「曹操様へ申し上げます！！ 数日前に我らと戦った五胡の軍勢が以前より数を増し、こちらに進行しています！！」

その言葉に華琳は目を瞑り、その言葉を脳内で存分に噛み締める。

「報告ありがとう、下がって良いわ。」華琳はそう兵をねぎらうようにそう言い重鎮達が座している場所を見渡す。最後に華琳の視線はKへと止まり、その表情には笑みが漏れていた。

「さて、皆聞いて頂戴。我が魏は以前五胡軍に対し辛酸を舐めさせられた。何故か、それはあのときの私達は腑抜けていたから……。しかし、今は違う！！ 一刀が願った魏の平和を侵略しようとする者達を一刀を愛し、愛された者ならば一刀の願いを叶えなさい！！ 我が名華琳の下に命じる。魏の平和を乱すものをすべからくなぎ払いなさい！！」

「「「御意！！」」」

華琳は三国で争いあっていた時のようにすさまじい覇気をその身にまとうていた。そして、華琳が家臣たちに命令するその様はまさしく、霸王の名がふさわしかった。

そして、霸王華琳に直々に命じられた魏の重鎮達は臣下の礼を取ると、皆自分がやるべきことを為すべく各自持ち場へと向かった。

そんな中一人だけこの部屋に残っている者がいた。

霸王華琳と新しき天の御遣いKだ。Kは重鎮達が臣下の礼を取っているときも一人椅子へと座りその様子を見ているだけだった。

「さて、Kあなたには私の友としてお願いするわ。この国を救うのに力を貸していただけじゃないかしら？」

「無論だ。それが、俺のここでの役目なのだから……」

Kはそう言うのと立ち上がり華琳の方を向いて不適に微笑むと、そのまま翻し扉を開け放ち外へと出て行った。

2・準備

Kは、会議が終わった後早足に馬屋へと向かっていた。その足取りはここへ来たのはつい最近の事であるのにまるで数年はここに住んでいたことがあるかのような足取りだった。

そんな時、Kの歩いている方向から翠がその長いポニーテールを揺らしながらこちらに向かってきていた。そして、Kの側まで来る。

「さつき、春蘭達が血相変えて来てたけど、会議はどうなったんだ？」興味からか、翠は軽く尋ねてくる。

「とりあえず、五胡の奴らを追い返す事になった。俺が華琳様に向こうでの一刀君の様子を話したら皆の目の色が変わってな。それに俺も参加する事になったので、こうして馬小屋に向かっているんだ」

「ふーん、なるほどね。あんたも参加するのか」翠は目を瞑り腕を組みながらふむふむと歩きながら聞いている。すると何か、思い立ったのか突然目を見開き先ほどまで組まれていた腕を自分の前に降ろし、チロチロとKの方を向きながら続ける。

「な、なら、あたしもついてやろうか？　ほ、ほら、やっぱり錦馬超と謳われたあたしがいたほうが戦力になるだろ？」

「それは、無理だろ。そもそも、お前はこの国、魏の将じゃないんだから。お前を戦線に組み込むとしても蜀に確認しなきゃいけないだろうし」

Kがそう言つと、翠はKの言っている事を理解すると、そつかあ。と言つて傍目から見ても分かるように落ち込んだ。しかし、直ぐに立ち直つて言う。

「じゃあ、あたし個人の考えで動けば良いんじゃないか！」

「だから、それも無理だ。今の魏は蜀に既に貸しが一つ出来てしまつたんだ。それでいて更に、蜀に貸しを作るなど今の華琳様は認めはしないだろう」

「そつかあ……」

そしてまた、あからさまに落ち込む翠。そんな翠をKは歩きながら一瞥すると。ふむ、とうなずき翠が何とかならないだろうか、と自身でも考えてみる。そして一つの考えを思いついた。Kは視線を前へと向ける。

「まあこれは独り言だが、お前が出てきてもお前だと認識されなければ。出て行つても問題は無いとは思うがな」

そう、Kはなんとなく呟くような声量で誰とも無く呟く。はつきり翠に言わないのは、自分が当事者にならないためだ。

そして、その都合の良い独り言をその可愛らしい耳で捕らえた翠は途端に元気になった。

「そうか、政治的な面で悪いんだったらしょうがないよな。桃香さまにも迷惑を掛けられないし」

そう言う翠で合つたがその顔はこんな手があつたか、とでも言うように輝いていた。

場所は変わつて馬小屋、そこには先ほど会議にて合つた霞の姿があつた。Kは馬の足を揉み解している霞に話しかける。

「おや、張遼殿ではないですか？ どうされました。私はてつきり他の方たちと同じくもう既に現地へとむかっているのかと思ったのですが」

Kは不慣れな敬語を使いながら話す。公私をはつきり区別しているという意識があるというのもあるが、霞とはあまり接点が無い事もあった。そして、Kは張遼の事を霞とは呼ばず張遼と呼んでいる。これもKとの接点があまり無かったためだ。

「ああ、けーとかいう奴か。ちよつとな私の愛馬なんやけどちよい筋はつとつてなあ。ほぐしとんねん。まあ、直ぐに終わるさかい。気にしとらんといてなあ」

霞もKのことを一瞥すると自分の愛馬の足の筋をほぐす事に専念した。Kはそれを一瞥し自らも乗る馬を激戦していった。

Kは元々、馬という物には詳しく無い。なのでこういった場面では彼の直感を信じるほか無く、彼が乗る馬は直ぐに決まるのである。そして今回彼が選んだ馬は、毛並みが白く筋肉のつきも中々良いと思われる馬だった。彼はその馬の腹の部分を撫でる。

「あつ、その馬はやめておいたほうがええで」そうしているといきなり、霞が言う。

「何故でしょう？ 結構良い体つきですし、見た目も良いと思うのですが……」

「ああ、そいつは結構いい馬なんは確かやけど。こないだの五胡との戦いにちよつと傷ついてしもた奴なんや。それがつい最近治ってきたばかりだからまだ本調子じゃないねん」霞はあと溜息をついて続ける。「あんた、見た目なんでも出来そうやけど意外と頼りにならんなあ」

「まあ、私自身馬に詳しいという訳ではありませんからね」

「しょうがない。この張遼さんのオススメの馬はやな。うーん、あれや。あの子は結構走ってくれると思うで」

そう言つて霞が刺す指の先には栗色の毛をした。これまた、筋肉隆々の馬が一頭いた。Kはそれを見てその馬に近付く。

「ふむ、なかなか。これも良い馬だ」

「やる？　今回はそれにして置くとええで」

3・出陣前

Kは今戦場へと向かって駆けていた。K自身乗馬という物はそこそこ経験があるので、良くありがちな馬酔いなどの心配は無い。

Kはその馬に乗りながらかなりの風を感じていた。その風はこの栗色の毛の馬が走ることによって生まれた風だ。Kはその風を感じる事によつて風と一体になっているような錯覚を起こした。その心地よさは、このままだと、Kは今何の任務を受けているのか忘れてしまい。そのまま遠乗りをしてしまいそうなほどだ。

そんな事を考えながら走っていると後ろから一頭の馬が駆けてきた。

「なんや、まだこんなとこにいたんかいな」

後ろから駆けてきたのは霞であった。そしてKの隣に並ぶと少しだけスピードを落としてペースをあわせる。

その霞の目は真剣で、何者にもきれぬような抜き身出る鋭さを持っていた。

「ええ、この馬はもつと速く走れるとは思つのですが何分自分の実力が伴っていないくて」

「ははっ、それならしゃあないな。無理せんと自分の調子で走つて来。うちらは今までとは一味もふた味も違うさかい。そこまで急ぐ必要はあらへん」

「どうやらそのようですね」

「そうやそうや。じゃ、うちはもう行くわ。じゃな」

「ええ、お気をつけて」

そう言つと、霞は今までの倍はあろうか、スピードを上げて戦地まで走つていつてしまった。

霞が行ってしまった後、Kは再び一人でその地を走る事となった。別段一人をさして寂しいなど感じる事が無いKは対して普段とは変わりはいなかった。

そのKが走っていると、ふと目の端に一つの不審な馬が駆けているのに気がついた。

「なんだ、あいつは」Kは不思議に思い、それがこの三国に仇名する者だった場合大変な事になる可能性があるので、スピードを上げその者に迫っていった。

「そこのお前、止まれ！！」

Kが大声にも似た声量でその者に話しかける。すると、その馬に乗っていた者はその声に身体を少しだけビクリとさせ、Kの申告どりにその馬のペースを下げ、そして止まった。

Kはその者の顔を覗き込む。するとその顔は可笑しな仮面で隠されてはいたが、Kの見知った人物だった。Kもそれに気がつく。

「ああ、お前か。どうした、こんな所で俺より早く出て行ったものだから、てっきり既に戦場にいるかと思ったのだが」

「えー！ お、お、お前、私が誰だか分かるのか！？」

その者はKがいった事を聞くとあからさまにうろたえた。

「いや、そもそもお前隠す気があるのか？ 仮面で顔を隠すだけなんて、町で遊んでいる子供にも気付かれるわ。髪形も同じだし、服も同じ、それから武器も同じと来たら気付かないほうがおかしいだろう？」 翠

その者は翠だった。

翠は、先ほどKの独り言を聞いた後自室へと戻り、何か自分の身を隠せるものは無いかと、考えた時。ふと思い浮かんだ事は華蝶仮面だった。

翠の属している蜀の国では困っている者がいると、華蝶仮面が出てきてその困りごとを解決するという話があった。

それを思い出した翠はなら自分も仮面をかぶれば良いのでは？と考え実行したのだが。どうやら上手くいかなかったようだ。

「うー、せつかく。頑張つて考えたのにこれじゃ意味が無いじゃないか」

翠は悔しそうに言う。そこには決戦前だというのに朗らかした雰囲気があるにはあった。

「しょうがない。後で俺から華琳様に、今回の戦で一人戦力が増えると言っておこう」

Kは頭をかきむしり悔しがっている翠を見て言う。すると、翠は見る見る内に立ち直っていった。

「本当か!？」

「ああ、ただし。そのへんてこな仮面をかぶって戦場には出ることが条件だ」

「ああ、それくらいなら大丈夫だ!!」

こうして、翠が陰ながら今回の戦で参戦する事が決まった。

続かない幸せ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

第六話目、お楽しみいただけただのなら幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4927y/>

恋姫†無双 ～黒槍の御遣い～

2011年11月24日01時55分発行